

5版、四五〇頁、価八〇〇円、不昧堂發行)

——(狩野直順)——

Samuel Bernstein,

The Opposition of French  
Labor to American Slavery.

Science & Society,

Spring 1953 (Vol. XVII, No. 2)

南北戦争をめぐる諸研究は、近時めざましい発展をみせているが、とりわけ注目すべきは、「第二次アメリカ革命」がもつている國際的衝撃力への関心が高められつつあることである。すなわち、奴隸制の存続をめぐる北部と南部の抗争は、理念的には民主主義自由主義の展開を、制度的には自由貨銀制の確立をめぐつて、國際的に広汎な影響をあたえたところである。そしてその場合、ヨーロッパにおける反応は、労働者階級を中心として、奴隸解放に同調する急進勢力と、それに反対して対米干渉を行おうとするブルジョワ支配者層の保守勢力との対決という形に要約される。ここにとりあげたS・バーンスタイン(ニュー・ヨーク市立大学)の一文も、右の

点に注目しつつ、とくに未開拓なフランスの事情を、労働者の動きを中心にとらえようとするものでもある。以下にその要旨をかげてみよう。

#### 序

南北戦争の影響力は國際的なひろがりをもつており、とくにその経済的イムパクトは棉花および小麦その他の食料供給を通じて英仏兩國に強く波及せずにはおかなかった。そのため英仏兩國においては、所謂「棉花饑饉」が生じて産業資本家ならびに労働者の両階級に大打撃を与えた。この結果、英国のパーマーストーン政府、およびフランスのナポレオン政権は、国内の木棉産業につらなる産業資本家、大商人等の要請にもとづいて、対米干渉を行い、南部の支援、奴隸制の存続をこころみようとした。一方労働者階級を中心とする勢力は、「棉花饑饉」による失業、操短等に苦しみながら、たえず北部の奴隸解放運動に同調しつつ、国内および國際的進歩勢力を結集して支配者層の対米干渉政策を牽制しつづけたのである。この場合、英国労働階級がその主役になつたことは間違いないし、最

近の諸研究もつばらこの点に集中されているのも当然といえよう。しかし吾々はこの際、一歩すすんでこれ迄見逃されて来た重要な事実、すなわち、フランス労働者もまたアメリカにおける反奴隸制運動を促進せしめたのだという事実注目しなければならぬであらう。ここでは、第二帝政下のフランス労働者の動きを、南北戦争とのつながりを通して考え、新しい研究へのサジェストを求めてみよう。

#### 一

南北戦争による棉花饑饉(cotton famine)がフランスにあたえた影響は、その産業資本主義、とりわけ木棉工業の後進性のため、英国における程甚だしいものではなかつたが、それにしても次の如きはげしさをもつていた。すなわち、一八六〇年におけるフランス木棉工業は、約七〇万俵の棉花を必要とし、その大部分を合衆国よりの輸入に仰いでいたが、北部海軍による南部諸港の封鎖によつて、六一年九月には入荷僅か一九一俵に激減した。また、当時の木棉工業労働者は一三〜四万人で、家族および同系産業労働者を合計す

ると、北部の封鎖によつて直接影響をうける人々は推定一五〇万人に達した。このため資本家は原棉の代替供給源をエジプト、インド等に求めると共に、棉花饑饉を口実に最大限の利潤追求をこころみ、それによつて生ずるあらゆる困難をすべて労働者階級にしわ寄せしていつたのである。すなわち、労働時間の延長、低賃銀、婦女子労働の強化等がそれである。このため、六二年末までに、セーヌ下流地方のみで一三万人が失職したといわれ、当時の新聞も労働者の悲惨な状態を書いて、「彼等は、葉っぱ、水でつくつた一種の饑頭でうえをしのぎ、半裸の子供は田舎にいつて百姓にスプやいもをねだつた。」とつたえている。

この状況に対して、ナポレオン政府とそれをめぐる支配者層は、南部の勝利に終る短期戦の見透しと、それにつづく繁栄の復活を予想していたため殆んど対策を考えなかつた。これに反し、パリにおける労働者階級の指導者達は、単なる慈善行為の範疇を一步こえた失業救済のための独自の委員会をもうけて大々的な活動を展開した。その中心人物は、ア

ンリ・トレーン、J・G・プラン、ペラシヨン (Henri Tolain, J. G. Blanc, Parachon) の三人であつたが、彼等は労働者の団結と大々的な資金の呼びかけを行つた。この動きの實際的な効果は大したものではなかつたが、それが刺戟となつてもたらした諸事情はみのがせないものがあつた。すなわち、フランスの労働者はこれを契機として、団結をかためると共にしばしば賃銀ストライキを行い、労働者代表を議会に送ることをこころみた。たとえば六三年の総選挙には労働者の投票は二〇〇万票にのぼり、三二人の代議士を選出したし、さらに六四年には六〇人の行動的な労働者の手になる「六〇人の宣言書」(Manifesto des 60) が發せられて、政治活動におけるブルジョワと労働者の平等をとねえ、フランスの全労働者の団結を促したのである。これらの動きは、やがて六四年における第一インターナショナルの創立に際してフランス労働階級の動向を決定し、前記トレーン、ペラシヨンおよび一六〇人の宣言書の署名者のうち九名が、その指導的メンバーとして参加するにいたるのである。こゝみてくると、南北戦争

による「棉花饑饉」と、その犠牲者に対するフランス労働者の救済運動と組織化は、万国労働者協会 International Workingmen's Association の設立という国際的結束につながつていつたものであるといへる。さらにその意味で、南北戦争に關していえば、それが英仏両国の労働者に与えた苦しみは、彼等の間に共通の利害感情をあたへることによつてその団結をかため、遂には第一インターナショナル設立にいたる諸条件を構成し、提供したものと考へて差支えないであらう。

二

さて、南北戦争とフランスの關係は事実上はもつぱらナポレオン三世のメキシコ干渉をめぐつて展開されることはいふまでもない。したがつて、この強硬外交に対するフランス国内の動きがどうであつたかをみることに問題となる。

一体フランスにおける南部支援派は、棉花産業における資本家、それにつらなる商人層、南部と深い金融關係にたつ銀行資本家、南部を市場とする奢侈品製造業者等からなり、その言ひ分は、ヨーロッパ、とくにフラ

ンスは経済的にみれば棉花を通じて、北部よりはるかに深く南部とつながっており、倫理的精神的にみても、南部はアングロ・サクソンののであるより、ガロ・ローマン的であるというにあつた。ナポレオン三世のメキシコ干渉もこの様な勢力を背景として、米大陸におけるラテン帝国実現の手がかりとしようとしたものであつた。

一方、メキシコ干渉そのものに対する国内輿論は、はじめは積極的な支持もなければ、はげしい反対もないといつた一見甚だ曖昧な動きをみせていたのであるが、その中から徐々にメキシコ干渉反対、北部支援の勢力が結集されていつた。その勢力は、自由と平等にいろいろられたフランス革命こそは、ネグロ解放のさきがけであり、その伝統をつぐフランス人は、奴隷国家というアナクロな存在を許すことは出来ないのだという考え方のもとに結集されたものであつた。その中心人物は、政治家モンタランベル伯 Count Montalambert、司教デュバンルー Dupanloup、社会学者オーギュスタン・コシヤン Augustin Cochin、歴史家フランソワ・ギゾー Francois Guizot、ア

ンリー・マルタン Henri Martin、一八四三年の奴隷廃止委員会 (The Committee of 1843 for the Abolition of Slavery) の議長ブロイ公 Duke de Broglie 等であつて、議会における進歩派および有力新聞『*Sigle*』、『*Temps*』、『*Journal des D elais*』、『*Opinion nationale*』、『*Plaine de la Loire*』等が参加した。そしてこの勢力は、フランス国内の輿論を圧倒的に掌握して、六四年にメキシコ干渉、奴隷制度反対の立場を標榜するフランス奴隷解放委員会 (French Committee of Emancipation) を設立するに至つた。南部連邦のヨーロッパ出先機関は、この間の事情を以下のように國務長官に報告している。「皇帝とその側近を除いて、すべての知識人、科学者、社会的有力者は……吾々に對する根深い反感をもつて、黙殺と急進主義とに組んでいる。……皇帝は、何等かの現実的利益をもつて宥和するか、何かの口実をみとめさせるかしなければ、この普遍的な(國民)感情を排撃し、思ひままに行動することは出来ない」と。

この場合、これらフランス國民のメキシコ干渉および奴隷制反対の動きをもつとも強力

にざさえた実勢力となつたのは労働者階級であつたといふことは注目されねばならない。すなわち、彼等はボナパルティズム下の悪条件にあつたため、英国労働者にくらべてその動きは甚だ緩慢であるようにみえたが、それ丈に「棉花饑饉」による悲惨な生活状況にもかかわらず、奴隷制の打倒、メキシコ干渉の中止、北部支援の態度は確乎たるものがあつたといえる。当時の新聞は、「労働者は平靜である。労働者は辛棒、つよく災厄にたえてゐる。彼等は平和をみだすような如何なるデモもさげているのだ。」と伝えているが、事実ヨーロッパ各国で労働運動が活潑化した南北戦争時代を通じて、フランスではナポレオンの權威にいどむ様な労働者の擾乱事件は一件も報告されていない。しかし彼等は異常な熱意をもつて、奴隷所有者とそれにつらなる支配者層に屈するよりも、災厄にたえることを選び、メキシコ干渉反対、奴隷制打倒の広汎なフロントに参加し、それを推進せしめたのである。このような行き方こそ、当時のボナパルティズム下のフランスにあつては、間接的ではあるがもつとも適切な奴隷制支援の干

渉に対する反対運動であつたといえよう。

フランスの労働者は、このような立場で、北部への同情と協調を可能なかぎりの方法で表現した。すなわち、南部支持の公的プロバガンダに対しては徹底的に冷淡な態度をとつたことがその第一の方法であり、あらゆる投票の機会に反ナポレオンの意志を表明しつづけたことがその第二法であつた。かくて、たとへば六三年の選挙戦においては、労働者階級のこの様な圧力が加わつて、「The American War & Mexican Campaign」なるスローガンは抹殺されるに至つた。

## 三

南北戦争をめぐるフランス民衆の動きは、大統領リンカーンの暗殺においてその頂点に達する。この事件に対するフランス民衆、とりわけ、棉花饑饉によつてもつとも手痛い打撃をうけた北フランス民衆の悲嘆は前例のないものであり、駐仏アメリカ大使 J・ビゲロー John Bigelow の手許には連日メッセージがよせられた。彼はこの事情を國務長官 W・シュワート William Seward につたえて、「フランス民衆は、リンカーンの生命をうばつた

おそるべき犯罪によつて、如何に広汎なショックをうけたかを示したのみならず、リンカーンがフランス民衆の尊敬と賞讃をいかに深くうけていたかを示した。今日、彼の名声がヨーロッパの民衆にふきこみ熱狂をどれだけ高く評価してもしすぎることはない。……」と書いてある。事実、議会における左派の議員七四名は共同で書簡を發表してその中で「アメリカ市民と衷心から結びあつた吾々は、奴隸制の最後の痕跡を破壊した偉大な民衆と、光榮ある殉難者リンカーンに、吾々の賞讃をささげる。」とのべた。更にリンカーン未亡人には夫をたたえるメダルを贈ることが決定され、全国の非常な反響のうちにもその寄金がなされた。これらの動きのうちにもつとも活潑な表現にうつつたえたのはルイ・ブランキ Louis Blanc に指導されたパリの学生隊であつた。彼等は一万二千人以上のデモを敢行しようとして官憲に阻まれたが、六五年四月末には学生の総意をつたえる書簡を駐仏アメリカ大使に手渡した。それは、フランスは今や主人もなければ奴隸もない国なのだ、ここではずべての人は自由であるか、自由を

かちとるために戦いつつあるのだとのべ、大衆の彼方のリンカーンと新しいアメリカこそは真のデモクラシーを学ぶにあつて我々が仰ぐべき偉大な人物であり、国家なのだとうたい上げたものであつた。

このいささか浪漫的な国際主義と社会主義的な傾向は、それにもかかわらずボナパルティズムにとつては一つの脅威であつたことは疑いえない。なぜなら、その背後には、この脅威をますます迫力あるものにもりあげていつたフランス労働階級の力が存在したからである。

当時のフランス労働者一般の意向を端的にしめしているのはツール Louis の労働者が駐仏アメリカ大使に送つた書簡であつた。すなわちそれには、「県の公式の意見だけしか述べないような新聞が一つあるだけで、自由が官憲や御用機関の手によつて制限されている都市で、二〇八人の署名をえることは困難なことでした。我々の書簡は、荒くれた労働者の汚れた手をつぎつぎと通つて、あなたの御手許にとどくでしょう。ここには、偉大な共和国への同情をあらわすしが真心こめて

するされています。……その手は、自由の歩みを矯正するのだといふごまかしの下に、自由の上につかみかかる一切のきつなをひきちぎるでありましょう。その手はあなたの市民の手をもつとも、けいけんににぎる手なのです。」とされるされており、南北戦争を契機とする反ポナバルティズムと国際主義の高まりを反映している。

しかし、ここで問題になるのは、たえずフランス労働運動の中軸をなしてきたパリの労働階級の動きであつて、彼等の動向をとらえることが、当時の情勢を判断する際の必須要件であつたことはいふまでもない。

一体表面的にみて、パリの労働者、ことに指導者達の動きははじめのうちは地方の労働者にくらべてはなほだ不活潑であつたようである。たとえば、彼等は、何等の書簡も発表しなかつたし、ブランキスト学生や地方の労働者との強力な連繫もとらず、むしろ、歴史家マルタンの手になるフランス奴隸解放委員会 French Committee of Emancipation の穏和な書簡（南北両派の和合をジョンソン大統領にうつつたえたもの）に同調する傾向さえみせた程であつた。この理由は、パリの労働階級指導者の殆んどが、もつぱら労働者の政治

活動への積極的な参加を抑えようとするブルードン主義者であつたということに求められている。しかしこの同じ指導者達はやがて、

英国の労働組合主義者「Trade Unionist」と手とり、第一インターナショナルの積極的な担い手となつたこと先述の通りである。とすれば、パリの労働階級指導者達のこの様な態度の積極化は結局のところ、さきに、ツールの労働者の書簡にみた如き全フランスに高まつた、反ポナバルティズム、反奴隸制の動きに刺戟されたことは疑いないところであらう。

事実、たとえば、六五年にマルクスが、ジョンソン大統領に対して、如何なる妥協もさげず、奴隸解放の仕事を果たすべきことをよびかけた書簡を、第一インターナショナルの総会に宛てて書いたときも、第一インターナショナルのパリ・ビュローのメンバー達が異議をとなえたという記録は全然ないし、それどころか、六五年の第一インターナショナル・ロンドン大会では、合衆国における国家統一と自由労働の勝利を積極的に祝福したことが知られており、さらに、同大会の結果、六五年九月二五日付で、アメリカの民衆あてに発せられた激励と協力をのべた以下の如き書簡にも同感をしめしたことが知られている。そ

の書簡はのべている。「あなたがたは、今日以後、自由で平等であることを、何のためにもなく宣言しなさい。もしあなたがたが、この権利をなげすめるようなことがあれば、早晩あなたの国を再び血まみれにする様な新しい闘争に直面するでしょう。……我々は共通の名分に生きる兄弟として、あなたがたがすべての自由をうばう鎖をたちぎることを忠告します。……」と。

こうみてくると、要心ぶかいブルードン主義者達で構成されていたパリの労働階級指導者達でさえ、もはや全フランス労働者の強烈な反奴隸感情に抵抗しえなかつたのであり、もつといへば、全フランス労働階級は、一部はその資本主義的後進性のために、一部はポナバルティズムによる法的制限のために、英国労働階級の如き組織的な力をもつにいたらなかつたといへ、当時すでに、皇帝ナポレオン三世のレジームと、それがよつてたつ経済組織に挑戦する力をみせつあつたといふのである。そして合衆国におけるネグロ奴隸の解放闘争は、その間、フランス労働階級がアメリカ干渉政策に譲歩せず異常な困難にたえたところであるが、彼等の間に国内的ならびに国際的双方における連帯感情を結晶せしめることに役立つたのである。